



雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL: 03-3611-0573 FAX: 03-3611-0574

H.P: <http://www.skywater.jp/>

e-mail: office@skywater.jp

国内外で雨水市民の会はこんな活動をします

総会報告

今年度の10プロジェクト

6月20日午前10時から、すみだ環境ふれあい館にて、第10回定期総会が開かれました。2003年度の各部会の事業報告と決算が承認されたあと、今年度の活動計画、予算、役員が決まりました。

今年度は2ページにあるような10のプロジェクトに取り組みます。2005年8月に開催される雨水東京国際会議を最重点課題として位置付け、各プロジェクトの成果を国際会議に結びつけていきます。

現在、世界で安全な飲み水が利用

できない人たちが12億、その3分の2はアジアです。とくに急激な人口増加と経済成長が見込まれるモンスーンアジアでは、今後の水需要が急増し、水戦争も起こりうるような深刻な水危機が予測されています。今後の雨水利用の積極的な活用は、ひとつの有力な水危機への対策となるでしょう。市民の会が3年前から展開している、バングラデシュでの雨水を飲料水にする運動もその一環です。

皆さんも積極的に参加し、国際会議を成功させていきましょう。



考案者の徳永さんがバングラデシュで普及を目指す竹製雨水集水器を説明した

目次

- 2P: 今年度の活動予定・各プロジェクト紹介
- 3P: 2003年度事業報告 - 雨水利用技術者セミナー 報告
 - ・第4回あまみず公開セミナー 報告
- 4P: ソウル大学韓教授投稿 - 濟州島にてUNEP 総会・GMEF 開催
- 5P: 雨水東京国際会議・プレ会議の基調講演 - 高橋裕氏からのメッセージ
 - ・実行委員会分科会、活動開始
- 6P: 台風の雨は蒸留水 - 雨水資料室で雨の水質検査
 - ・日中コース水フォーラムに参加して
 - ・打ち水大作戦 約1度の効果
 - ・国際水協会でも注目!
 - ・「やってみよう雨水利用」「スカイウォーター」中国語翻訳中
- 7P: 風コーナー
 - ・平成16年7月福井豪雨に遭遇して
 - ・川がよみがえる - 真間川流域水循環系再生構想
- 8P: 募集! ドイツでの雨水ツアーに参加しませんか
 - ・あまみず公開セミナー申込受付
 - ・「下水道の中に入る体験」見学会に参加しませんか

スカイウォータープロジェクト最新報告

竹で集めた雨水はうまかった

- バングラデシュ・NGOグループと共同活動 -

今年も7月2日から8日にかけてバングラデシュへ徳永副会長、村瀬事務局長、佐藤清さん、今関久和のメンバー4人で行ってきました。



村人手製の竹製雨水集水器があちこちに設置されていた(ザックヒラにて)

徳永さんが考案した竹製の雨水集水器を、昨年バングラデシュ訪問の際に紹介した結果、何箇所かで設置されたと情報がありました。その状況調査と、バングラデシュのNGOグループと一緒に具体的な活動をする準備をすることを目的としていました。

調査の場所は、コミラとザックヒラの2箇所でした。2つのNGOグループと接触し、状況を説明してもらいました。特にザックヒラ周辺の場所は海に近いため砒素に加えて塩害がひどく、長く飲み水に困っていたところで、ここでは本当に便利だと言う声が聞かれました。また、実際に飲み水に利用したり、生活に利用してい(*2P下段へ)

今年度の活動予定 - 各プロジェクト紹介

新) 雨の環境学習プログラムプロジェクト

将来、当会が学校や地域での環境教育に参画していくため、雨の実体験などの環境学習システムの開発、ホームページへの掲載

広報部会

会報「あまみず」の発行、電子メール配信 / 各プロジェクト報告のCD化とホームページ掲載

新) 2005年雨水東京

国際会議の企画

実行委員会の中心的役割を担う

手作り雨水タンク講習プロジェクト

昨年度同様、すみだまつりへの参加とあわせ、墨田区以外での雨水利用普及活動の支援

新) NPO法人化検討プロジェクト

将来、雨水利用ネットワーク機構整備や環境学習などの活動の中心的な役割を果たしていくために、NPO化の検討をする



雨と文芸チーム

テーマを決めて資料収集と解析

あまみず公開セミナープロジェクト

10月2日(土)「江戸の下水道 - 川柳が描く水と暮らし」講師: 栗田彰 / 11月6日(土)「緑のダムと水循環」講師: 藤原信 / その他企画中

雨水利用ネットワーク機構整備事業

国際協力・国際支援(スカイウォーター)プロジェクト
 バングラデシュの地元NGOフォーラムとの共同事業
 アジアユース雨水利用ネットワーク機構の整備
 4月に北京で開かれた日中水フォーラムへ1名派遣。雨水利用の交流を通じて、来年の国際会議につなげる
 アジア・研究者間の雨水利用ネットワーク機構整備
 9月にモロッコ・マラケシュで開催される国際水協会にて、雨水利用の研究者の意見交換を行う
 日独雨水利用ネットワーク機構整備
 11月にドイツの雨水利用技術者セミナーに派遣
 雨水利用技術者セミナー支援
 今年度、関西雨水市民の会が行うセミナーへの支援

雨水探検隊

田植え、学習会、稲刈り、収穫祭などの探検活動。ニュースの発行

情報部会

ホームページのリニューアルと随時更新 / 雨水データベースの利用法検討 / ホームページ勉強会

*(1Pより)るところを見ることができ、得るものが多い調査でした。

雨季の5~6ヶ月はこの集水器を使って雨水を飲めば、体内に取り込まれる砒素の量を少なくすることができます。あとは全く雨のない乾季の問題です。これには雨水貯留タンクや地下水の砒素除去装置が良いのですが、資金の問題があります。この点が今回のバングラデシュを訪れたもう一つの目的で、信頼で

きるNGOグループと共同で安価な雨水貯留タンクを作る方策や、これを使って収益を増やす方法がないかなどを探りました。

砒素で健康被害を受けているバングラデシュの人たちが、そのことを自分たちの問題としてはっきりと認識し、自分たちの力で問題の解決を図れるようにサポートすることが最も必要だとあらためて確信しました。(今)

2003年度活動報告 総会報告

雨水利用技術
者セミナー

雨水利用の普及は技術者が鍵!

2月6日(金)、雨水利用技術者セミナーが、定員を上回る45名の参加で開催されました。雨水利用の知識や最新技術をもつ技術者の養成により、一層の雨水利用の普及を図る目的で、会として初めての試みでした。

ドイツのクラウス・ケーニッヒ氏(fbr理事)は、ドイツやヨーロッパでの研究を講演しました。なかでも、初期雨水は除去の必要がないと言われたことが印象に残ります。最新のフィルター技術や沈殿によって初期雨水に含まれる汚染物は、ほぼ

除去されるとのことでした。岡田誠之氏(東北文化学園大学教授)は、雨水利用に関する各自治体の取り組みを話しました。小川幸正氏は、設備面から動力を使用しない沈殿槽とフィルターによる簡易スクリーンを紹介しました。佐藤清氏は、雨水利用の歴史や個人住宅における雨水利用の実例について、また、村瀬誠事務局長は、雨水利用の展望について報告しました。

今年度は、関西雨水市民の会で開催する技術者セミナーにテキストや講師などについて支援していく予定です。(清)

テキストの欲しい方は事務局まで(一般5000円、
会員4000円)

第4回あまみず モンスーンはどうして起こる?
公開セミナー 日本のお梅雨のルーツを探る

2月28日(土)に神田学士会館で、19人が参加して開かれました。講師の平井信行氏は、現在、NHKのお天気番組に出演され、NPO 法人気象キャスターネットワークの代表もされています。平井氏は、言葉の由来なども交えながら難しい気象の現象を大変分かりやすく話してくださいました。

モンスーンとは、アラビア語で「季節」のことで、アラビアの船乗りが風向きの違いから名付けたことが始まりと言われています。日本でも冬の「ならい」、夏の「黒南風(クロハエ)」など、季節にまつわる風の名が各地にあります。インドでは、雨が多いときはGood Monsoon、少ないときはBad Monsoonと言っているそうです。雨が降ると「天気が悪い」と言う日本人の発想と逆なことが面白いです。モンスーンは、アジア大陸の南東縁、東南アジア、インドー帯に、豊かな雨をもたらし、世界の米の9割を作り、世界人口の2分の1を養ってまいます。

モンスーンはなぜ起こるのでしょうか。空気は、相対的に温度が高いと軽くなり、上昇気流が起こ



ります。温度が低いと逆に、下降気流が起こります。夏は、海より陸の方が温度が高くなり、風が海から陸へ吹きます。冬はそれとは逆方向に風が吹きます。これが、モンスーン(季節風)です。モンスーンの原因は、世界最大のユーラシア大陸、世界最大の太平洋、世界最高峰のヒマラヤ山脈が作り出すダイナミックな気象現象です。

梅雨は、東アジアの特有の現象です。ヒマラヤ山脈に沿ってオホーツク海に吹くジェット気流が、太平洋からの風とぶつかって梅雨前線ができます。中国でも梅雨(メイユー)、韓国では長霖(チャンマ)と言います。梅雨があるため、日本は同緯度の中でも年間降水量が際立って多い地域となっています。(朝)

あまみず公開セミナープロジェクト

6月22日「森の魔術師・変形菌を探そう」(高尾山フィールドワーク) / 10月11日「平安の気象予報士 紫式部 - 雨と源氏物語」(講師:石井和子) / 11月22日「京都の水文化を訪ねて」(京都フィールドワーク) / 2月28日「モ

ンスーンはどうして起こる? - 日本のお梅雨のルーツを探る」(講師:平井信行)

雨水利用技術者セミナープロジェクト

2月6日、すみだリバーサイドホール会議室にて、ドイツのケーニッヒ氏他、雨水利用技術の最先端をいく講師陣をそろえ実施。参加者45名。

投稿

済州島にて世界国連環境計画(UNEP)総会・世界環境長官会議(GMEF)開催 雨水利用を水危機の具体的方策として評価

UNEP SNU 雨水研究センター長・ソウル大学 韓(ハン) 武栄教授

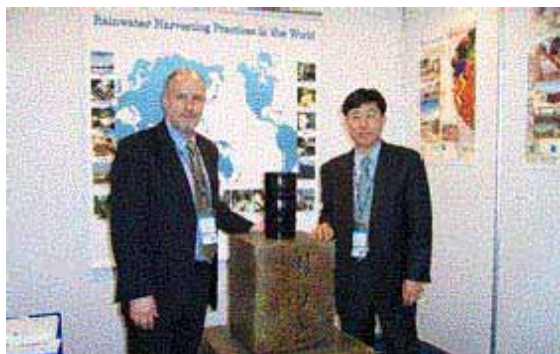
2004年3月27日～31日、第8次UNEP特別総会と世界環境長官会議が韓国・済州島の国際コンベンションセンターで開催されました。158の国家の政府代表、国際機構及びNGO等、約1,200人が参加して盛況裏に終わりました。UNEP特別総会では、国際環境管理体制、環境状態評価等が議題となり、世界環境長官会議(GMEF)では、水資源統合管理、水と衛生、水と貧困・健康問題等を議題にして会議が進行されました。

会議の期間中、UNEP SNU 雨水研究センターは3箇所のブースを設けて、雨水利用の必要性、世界各地の雨水利用施設の現況及び国際的な測雨器ネットワーク等を紹介しました。ブースでは、動画資料、大型ポスター、雨水利用に関する書物、世界で初めて発明された測雨器の実物大の模型を展示しました。多くの環境行政やマスコミの関係者が訪

れ、関心を示しました。

私は、特別セッションで「雨水利用 - 水のネットワーク」と題して発表し、雨水をより積極的に利用して、国際的な雨水ネットワークを通じて地球での人間と自然がお互いに均衡を保って生きていくように主張しました。

今回の会議の成果は、世界各国の環境長官らが“済州イニシアティブ”を導き出して、今まで抽象的、一般的レベルにとどまっていた水問題の解決に具体的、さらに実行可能な方法を用意したことです。この内容の中では、持続発展に関する専門技術として雨水利用について次のように述べています。「第16節：持続可能な技術：雨水収集のような代替技術または経済的に効果のある技術を開発し、適切な技術をより一層広く伝播するべきである。」



雨水利用ブースにある測雨器を前に(右が筆者の韓教授)



済州島の国際コンベンションセンター

* 2003年度活動報告 続き

雨水利用国際協力・支援(スカイウォーター)プロジェクト

7月18～23日バングラデシュへ4名を派遣。現地のNGOフォーラムと提携して当会が開発した「竹製雨水集水器」の普及活動展開。/ 8月19～30日アメリカ・オースチンでの雨水利用国際会議(ARCSA主催)とメキシコシティでの雨水利用国際会議へ4名派遣。/ 2月7日すみだ国際ファッションセンター会議室にて日独雨水利用ネットワーク会議開催。ドイツのfbr理事ケーニッヒ氏と当会の会員が意見交換。

雨水探検隊

4月19日両国付近の雨水利用施設見学/ 6月7日田植え体験/ 7月5日トンボフェア見学とペットボトルろ過器づくり/ 10月1日稲刈り/ 11月9日稲の収穫祭/ 2月21日水の科学館見学/ 大湊村の安部淳さんの協力を得

て墨田区内の保育園と小学校に稲を配布/ ニュース発行

雨と文芸チーム

小説、短歌などを中心に雨との関係について資料収集し、ファイルを作成。

手作り雨水タンク講習プロジェクト

10月3～4日錦糸公園のすみだまつり会場にて、だれでもできる雨水タンクづくりを実演。レインキャッチや蛇口がよく売れ、大盛況。

東本願寺と環境を考える市民プロジェクト

京都・東本願寺の大改修にあたり雨水利用のコンサルティング/ 11月21日東本願寺にて、「東本願寺と市民がともにできること - いのちと自然のこれから」と題するシンポジウム開催。実行委員会に参加。/ このシンポジウムを契機に、地元市民が中心となって東本願寺を舞台に環境学習講座を活発に展開中。

東京国際会議実行
委員会たより

プレ会議の基調講演 高橋裕氏からのメッセージ

雨水東京国際会議に期待する “アジアの水危機救済”

来年の国際会議に向けたプレ会議が、8月7日(土)午後1時半から、すみだリバーサイドホールで開催され、約90名が参加しました。辰濃実行委員会会長と山崎墨田区長の挨拶のあと、高橋裕東京大学名誉教授による基調講演がありました。

高橋氏は、今回の世界水フォーラム(2006年メキシコシティ)で、バングラデシュをはじめとするアジアの国々に対する日本の貢献を報告することがとても重要だと強調されました。世界の水需要は、1900年(人口約16億人)に比べると、2000年(約60億人)には10倍になりました。日本では1人1日330リットルの水を使っています。人間生活に最低限必要な水の量が50リットルと言われていますが、さらに下回る30リットル以下の国が38カ国もあるという現実には愕然とさせられました。国をまたがって流れる「国際河川」が、世界にはたくさん存在し、複雑な問題をはらんでいます。

一方、日本では、明治以来、水の量にのみ注目した国土開発をしてきたので、水循環を「不健全」にしてしまったという問題があります。さらに、最近、地球規模で雨の降り方が変わってきて、集中豪雨が多発するなど洪水が起きています。ダム、河川改修、浚渫という従来の行政主体の治水、利水

方針を、市民とともに変えていく段階にきています。

アジアにおいては、今後さらに人口が増加するインド・中国の水の使い方が重要になってきます。例えば、水洗トイレを使うと水が足りなくなってしまう。水洗トイレに代わるトイレの使い方が必要です。また、生活におけるシビルミニマム(最低限の量)という考え方がありますが、むしろシビルマキシマムという考え方が大事だということでした。モンスーンアジアでの雨水利用は、水需要の抑制に対し、確実に効果的な手段です。

アジアの中の日本という視点、また日本がとくにアジアにどう貢献していけるのかという視点を持って行動していくことの大切さを教わりました。(笹)



8月7日(土)、約90名が参加して雨水東京国際会議プレ会議が開かれた。

実行委員会分科会、活動開始

高橋裕氏の講演会のあと、第2回実行委員会が開催されました。まず、実行委員会事務局から国際会議開催の趣旨、日程案、予算案について提示があり、了承されました。また、新メンバーを加えて分科会ごとに顔合わせを行いました。これから分科会ごとに本格的な内容の詰めをしていきます。

会員の皆さんも、興味をもたれる分野に参加してみませんか。

雨の環境学習分科会の紹介

雨を学校などの総合的学習として行うための分科会を立ち上げました。日本の風土、暮らし、文化など私たちは雨に生かされています。酸性雨は悪者でなく、環境のシグナルです。雨の大切さを感じられるような学習活動をしたいと思っています。

分科会(これまで提案されたもの)

- 1 雨の環境学習
- 2 雨を活かした緑豊かな都市づくり
- 3 雨水貯留・浸透・利用
- 4 緑のダムと水循環
- 5 保水型下水道の構築
- 6 農からの発想・バーチャルウォーター
- 7 安全な飲み水の確保・雨の水質
- 8 雨水利用を進める政策
- 9 ユース雨水

そのため、この分科会では、見学会や資料集め、体験学習のプログラム作成などを予定しています。直近では、10月2日(土)10時から小平市のふれあい下水道館を見学し、午後は「あまみず公開セミナー」(詳細はP8)に参加する予定です。

台風の雨は蒸留水

雨水資料室で雨の水質検査

8月22日(日)、雨水資料室で酸性雨調査研究会が「夏休みこども環境調査公開分析会」を開き、村瀬事務局長も展示物の説明をしました。

インターネットや新聞で見て、集まった約10人の子もたちが、かなり真剣な様子で水質分析をしました。雨は、自宅、家族旅行した軽井沢、おじいちゃんの家、なかにはマウイ島のものまであり、導電率、pH、二酸化窒素を測定しました。一番きれいと評価されたのは、自宅で台風の日降った雨で、導電率7 μ S/cm、pH5.7。一番汚いとランク付けされたのは、台風の風が吹いている日に、地元中学の校庭でとった雨で、導電率78 μ S/cm、pH3.9



持ってきた雨を真剣な表情で水質検査。

でした。この雨をなめてみると、ホコリ臭い味でした。酸性雨調査研究会の方が土の粒が雨に混じった結果pHが低かったのでは...と説明されていたので、なるほどと思いました。(朝)

日中ユース水フォーラムに参加して

2004年4月18日～25日にかけて北京で日中ユース水フォーラムを北京で開催しました。日中の若者が120名集まり、両国の水問題とその解決策に対する討論、北京市内での水質調査、大同(北京の水源地がある)でのフィールドワークを行いました。中国でも水に興味、関心を持つ様々な分野の若者が一同に会すのは初めてとあり、単なる交流だけにとどまらず、実際の水問題を知り、現場に触れてきました。活発に意見や情報を交し合う過程で築いた日中の若者同士の友好関係を今後も大切に

打ち水大作戦

約1度の効果

今年の夏、日本は異常な暑さでした。そこでこの暑さに対抗し、みんなで一斉に「打ち水」をすることで気温を下げようという大社会実験を8月18日～25日に行いました。今年は東京だけでなく、横浜、名古屋、大阪、福岡など多くの日本の都市、及びストックホルムなど海外でも一斉に行いました。

都内では約40万人強の人たちが、全国では約300万人を超える人たちが打ち水を行い、地域差もありますが、約1度、気温が下がりました。この打ち水、一度使った水を使うことが原則であり、ためた雨水などで行ってもらいました。誰でも簡単に楽しくできる、そして水を打ち、人々の心を打つ。たかが水、されど水。それが打ち水作戦の醍醐味です。

打ち水大作戦の内容はホームページで見られます。アドレスは<http://www.uchimizu.jp/>です。(佑)

国際水協会でも注目!

雨水利用ワークショップ

9月19日～24日にモロッコのマラケシュにおいて開かれるIWA(国際水協会)で、初めての雨水利用のワークショップが行われます。IWA会長が座長を務めます。ここには、雨水利用に関心を持つ学者や研究者が参加する予定です。

雨水の「学」のネットワークを作り上げるよい機会になるでしょう。村瀬事務局長や韓(ハン)教授も講演します。

「やってみよう雨水利用」

「スカイウォーター」

中国語翻訳中

中国の水科学協会で、「やってみよう雨水利用」と「スカイウォーター(「雨の事典」の英訳版)」の中国語の全訳作業が進行中です。これを契機に、日中両国における雨の有効活用や文化交流を活発にしていきたいですね。(村)

ていこうと、インターネットを利用した情報交換・情報共有を行っています。雨水東京国際会議の分科会に議論を発展させていきたいと思っています。(佑)



風

コーナー

平成16年7月福井豪雨に遭遇して

四季折々、穏やかな顔を見せていた川が突如怒り狂い堤防を破壊する姿を目の当たりにしました。福井市を流れる足羽川は、その昔は暴れ川と異名があった九頭竜川の支流ですが、堤防決壊は初めてのことであり市民は一様に驚いています、と同時に「なぜ！」という思いが強いようです。

7月18日朝、美山町で6時10分までの1時間に96mm、福井市では8時01分までの1時間に75mm等、福井市も含め足羽川上流地域では半日で7月の平年値に相当する降水量となり、足羽川は一気に増水していきました。

当日の气象台の対応は、13日からの新潟の豪雨もあり、梅雨前線の南下が予想されていたために、3連休を前にした16日(金曜日)に「18日にかけて大雨のおそれあり」という「大雨に関する気象情報第1号」を発表し、18日も真夜中の2時34分に大雨警報を発表するなど対応を取りました。その後、大雨は早朝から午前中にかけて降り、堤防決壊は13時34分でした。

福井県や市町村の対応は早く、大きな被害が出た美山町では6時、福井市でも7時に対策本部を設置して災害に備えました。

今回の水害の特徴は、「堤防の決壊という古典的な災害が、現代都市の中心部で発生」ということでしょうか。近年は1999年の福岡豪雨(地下水没による死者発生)、2000年の東海豪雨(浸水家屋6万棟以上)等、都市型災害が頻発しています。寺田寅彦は昭和9年に「天災と国防」の中で「災害は進化する」といっていますが、最近の災害をみるとその感を深くします。

豪雨の原因等は今後の解析や調査研究で解明されてくると期待していますが、今年の新潟豪雨や四国の台風豪雨をはじめ各地で降った雨をみると、どこで何が起こってもおかしくないという感を強くしており、気が抜けない日々が続いています。(平沼洋司・福井地方气象台勤務)

川がよみがえる - 真間川流域水循環系再生構想

今、千葉県と東京都の境を流れる江戸川の東側に位置する真間川の流域水循環系再生構想策定検討委員会(千葉県主催)に参加しています。流域は、近隣する自治体は4市で、地域住民は45万人、全流路36.7kmの河川です。1997年の河川法の改正により、神田川を初めとする6河川がモデルとなり、環境を重視し、地域住民の参加による河川の見直しがなされ、真間川はその第二段というところで

す。真間川は排水と洪水対策を強化し、水田や谷地の斜面林などの景観は、ベッドタウン化して地面はコンクリートで覆われました。その結果、河川の汚濁、水量の減少、湧水の枯渇、洪水対策の限界など、流域環境は悪化するばかりです。その対策を市民参加で検討することになったわけです。

対策は、遊水地・調整池・雨水の貯留、浸透マス等の地下浸透、緑地の保全拡充などを挙げていますが、やはり、雨水の貯留・浸透が中心となります。

私がこの委員会で強調したことは、対策として貯留・浸透のみを重点においては効果が上らないこと、利用を入れた三角形にしなければ、市民意識は高まらないということです。「貯めて使って土に戻す」でなければ、雨は活かされないし、人間も活かされないということで、真間川構想は「これまでの暮らし方を見直し、自然との共生を目指して雨水を貯める、利用する、浸透させる」になりました。

検討しなければならぬことは多々ありますが、次の行動計画の中で具体化していきたいと思っています。(磯村良光)



足羽川が決壊寸前。福井地方气象台(右端上)も床上浸水、自宅も冠水を経験した。1階には電気系統などがあり、休日出勤した職員で排水や機材の確保に努め、豪雨関連の業務には事なきを得た。

募集!**ドイツでの雨水ツアーに参加しませんか**

「ドイツの雨水利用国家規格(DIN)についてもっと知りたい」、「雨水の水質についてホルンダー博士の講義を直接聞きたい」、「雨水利用機器メーカーを見学したい」。こんな声が、今年の2月6日に行われた第1回雨水利用技術者セミナー参加者から寄せられました。これを受け、ドイツにおいてセミナーと現地見学会を実施します。お世話いた

だくのは、セミナーに特別ゲストとしてお招きした、ドイツのfbr理事であり、雨水利用建築士であるクラウス・ケーニヒさんです。日程は11月19日(金)～26日(金)、費用は20万円程度(交通費、宿泊費、現地通訳及び手配費など。食事代別)、希望者は9月20日(月)までにメールもしくはファックスにて事務局まで。定員12名程度。

**募集!**

2004年度

第1回・第2回あまみず公開セミナー申込受付

雨を広い視野から見てみましょう。申込みは、事務局までメール又はファックスで受け付けします。
お願い：チラシを同封しますので、コピーなどして会員以外の方にも呼びかけてください。

第1回

庶民の暮らしから生まれた川柳を素材に、江戸の下水、井戸、天水桶や雨どい、庶民の暮らしなどについて語ってもらいます。100万の人口を支えた循環都市・江戸の姿と現代の私たちの生活を比較すると、いろいろな発見がありそうです。

日時:10月2日(土) 午後2時30分～4時30分
(午後2時開場)

講師:栗田彰さん(日本下水道文化研究会評議員)

内容:「江戸の下水道 -川柳が描く水と暮らし」

会場:中央大学駿河台記念館 330号室

(電話03-3292-3111)JR「御茶の水」下車5分

会費:会員1000円、非会員1500円

申込:9月25日(土)まで

第2回

ダムが河川環境を破壊し、生態系に大きな影響を及ぼしています。森林の整備こそ急務と説く講師から緑のダムの効用と水循環について語ってもらいましょう。

日時:11月6日(土) 午後1時30分～3時30分
(午後1時開場)

講師:藤原信さん(宇都宮大学名誉教授)

内容:「緑のダムと水循環」

会場:学士会館203号室(電話03-3292-5936)

地下鉄「神保町」下車3分

会費:会員1000円、非会員1500円

申込:10月30日(土)まで

募集!

「下水道の中に入る体験」
見学会に参加しませんか

雨水東京国際会議実行委員会・雨の環境学習分科会で、環境教育の実践を学ぶため、まず見学に行きます。ご一緒しませんか。

日時:10月2日(土) 午前10時

見学場所:小平市ふれあい下水道館

小平市上水本町1-25-31 電話042-326-7411

交通:西武国分寺線「鷹の台」下車徒歩7分

津田塾大学隣

ふれあい下水道館の入口に10時に集合します。

申込は原田まで。メール(t-harada@d5.dion.ne.jp)

FAX(020-4664-7108)。当日は携帯(070-5563-3740)

村瀬&中臣「水」トーク

8月14日(土)、ジュンク堂書店池袋店で、村瀬事務局長と会員で今年3月に『「水」の安心生活術』(集英社新書)を出版した中臣昌広さんが、「水」をテーマにしたミニ講座を行いました。健康志向から水へのこだわりを持っている若い人が多かったようです。この本は、保健所の「水」の専門家として住民の相談に応える中臣さんの奮闘記です。

編集後記 今年、日本に上陸した台風の個数は9月7日時点で7個。気象庁が1951年から記録をとり始めて、過去最多だそうです。洪水はそのままなさそうですね。洪水にしても濁水にしても、ハード主体の行政に任せず、市民のソフトな知恵を使おう。